

2013

北の大地—風の記憶—



宗谷丘陵 風車群

7月10日(水)

自宅(15:10)—(東部自動車道)—仙台港フェリーターミナル(15:40)(19:40)
～(太平洋フェリー)～ (25km)

今日の天気予報によると、仙台は午後3時以降の降雨の確率が高くなっている。船に乗る前にカッパを着るのも不愉快になるので、雨を避けるため、早めに自宅を出発した。随分早く着いてしまったが、先客のバイクが2台いた。そこで、いつもの港と雰囲気が違うことに気づいた。あるべき所に、今日のフェリーの「いしかり」の姿がないのである。一瞬、欠航か、と不安になったが、落ち着いて考えてみれば、自分が早く着きすぎたため船がまだ到着していないことに気がついた。ということは、大型船の接岸を見ることができると、カメラを持って岸壁に向かい、接岸位置を予想して待った。岸壁に港湾関係者の車が目立つようになってきたので、そろそろかなと思っていたら、停泊中の大型船の陰から一際大きい船がゆっくりと姿を現した。船首に、「いしかり」と遠目にも読み取ることができた。姿を現してから30分くらいかけて接岸し、車を積み込む船首のゲートが開きだした。航行中に水が入らないように複雑な構造をしているぶん、ゲートの開き方は見えて飽きない。



春日さんは今年も到着が遅れて6時過ぎになり、開口一番、「カツオ船を待っていたら遅くなった」と言っていた。ということは、明日の素泊まりの宿での夕食が楽しみということである。いつものように、春日さんは生ビールで、自分は赤ワインで、明日以降の充実した旅を願いながら乾杯し、レストラン閉店まで楽しい話が続いた。

7月11日(木)

苫小牧港(11:15)—(道央自動車道)—(旭川紋別自動車道)—丸瀬布—R333—493—瀬戸瀬温泉(17:00) 瀬戸瀬温泉ホテル (314km)

【昭和の奥の残る瀬戸瀬温泉】

今日の目的地までは距離があるため、時間を稼ぐために道央道をひたすら北上した。昨年のトラブルの後、調子が悪くなった純正のキャブレターをS&Sのキャブレターに交換してきたが、昨年同様のトラブルはなく、右手に夕張岳、芦別岳、左手に暑寒別岳を眺めながら、鬼門となった砂川S・Aも難なく通過した。しかし、純正のCVキャブと比べるとS&Sのキャブはフィーリングが大味で、加速時には問題が無いが、常用回転域での走行にはギクシャクしたような走りになってしまう。旭川紋別自動車道の北大雪トンネルは4000mを超える長いトンネルで、ヒンヤリとするというよりは寒いくらいだ。バイクにとって、トンネルは排ガスの

トンネルを走るようなもので、トンネルを抜けた瞬間、思いっきり空気を吸い込む。

今日の宿は、温泉ホテルといっても夕食の出ない素泊まりだけの宿なので、その手前の町のコンビニで夕食の買い出しをした。買い出しといっても、魚系は春日さんのサイドカーに積まれている大型のアイスボックスの中に期待し、おにぎり、お新香、野菜サラダぐらいにしておいた。小さな町の丸瀬布で起きた大きな交通事故のため、国道を迂回する羽目になり、時間をロスした。

今日の宿の瀬戸瀬温泉は、湧別川の釣り場に近いことと、温泉宿としては廃れた宿のようだが、温泉の泉質が評判とのことで選んだ。遠軽のビジネスホテルでは道内最初の宿としては面白味がないし、いつも泊まる道東の「さろまにあん」には少し遠いのである。国道を右折し、のどかな山里の中に続く一昔前の雰囲気漂う一本道を、しばし気持ち良く走ると突然道は途絶え、林の中に大きな建物が見えた。見るからに一昔前の建物という雰囲気であるが、なぜか気持ちが安らぐ。オーナーらしき人と雑種の犬が出迎えてくれた。玄関の中から帳場、2階へと続く階段の雰囲気も昭和の臭いがして懐かしく感じられた。しかし、2階の



瀬戸瀬温泉

部屋は西日をまともに受けてサウナ状態だったので、窓を全開にしてから、評判の温泉に入ることにした。内湯の大浴場しかないが、天井が高く開放的だ。最近の温泉場に見受けられる、とってつけたような露天風呂はなくてもよい。透明で美しい湯だが熱すぎて、のんびり長湯はできないのと、換気が悪いせいか、浴場内に湯煙と熱気が籠もり、長居はできなかった。風呂から上がっても、異常なくらい汗が出るほど温まる湯のよ



瀬戸瀬温泉の浴室

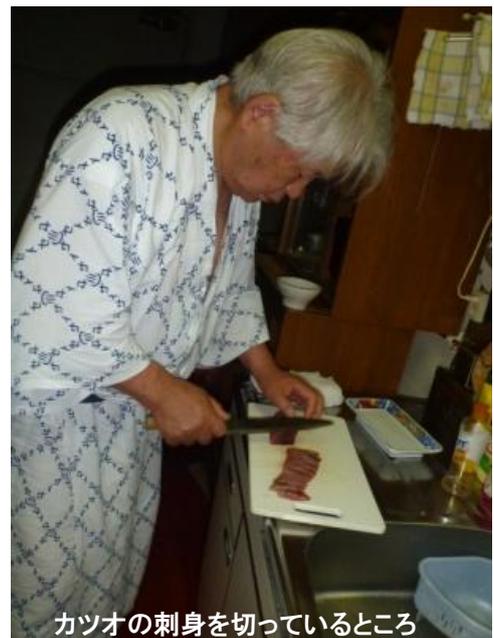
うだ。こういうときは冷たいビールに限ると、帳場にいた主人にビールを頼んだところ、自販機から買ってと言うし、「さっき入れたばかりだから、あんまり冷えていないかも、350mmのほうは冷えていると思う」とまで言う。とりあえず350で乾杯をしたが、つまみが欲しくなり、春日さんのアイスボックスの中身をおねだりした。そこで出てきたのが春日さん自家製の、米酢と味噌のタレに漬け込んだカツオである。これを作っていたためにフェリーターミナルへの到着が遅れたのである。始

めでの食べ方だが、米酢での締め加減に味噌味がほどほどに効いて実に旨い。客は我々だけだったので、宿の主人にもご馳走したが、「これは旨い！」と喜んで、今まで、以外とぶっきらぼうだった態度が途端に友好的になり、釣りの情報とかを次から次へと話し始めた。その内容からすると、湧別川は釣りだけの目的で来る価値がありそうだ。

そうこうしているうち、ハーレー独特の排気音が響いてきた。ほぼ予定通りに横浜の関水さんが到着した。大洗からのフェリーは苫小牧着が13時30分なので、相当飛ばしてきたことになる。明るいうちに到着して良かった。暗くなると、国道からの右折地点の標識が見えにくくなり、通り過ぎてしまうことになるからである。関水さんは風呂へ行き、我々は食事の準備をすることにした。ここは、自炊の設備があり、簡単な台所と自由に使えるガスコンロと食器類もある。早速、春日さんは持参の自社製品の干物を焼き、カツオの刺身を鮮やかな包丁さばきで作り始めた。包丁も持参していたのだ。干物の香ばしい臭いがたちこめてきた。テーブルにそれぞれ並べ、関水さんを待つこともなく、2回目の乾杯をして食事となった。干物はアジ、サバ、サンマで、サバから食べたが、ほんのりと薄味の塩加減が効いてことのほか旨い。春日さんは日本酒も持ってきてくれたので、このご馳走には日本酒が最高だと切り替えた。先ほどの米酢味噌のカツオは勿論、カツオの刺身も旨い。へたな宿の食事よりはるかに旨い。こういう宿のやり方も、自由気ままに好きなようにできるのでなかなか良い。

それにしても、関水さんの風呂は長い。以前から長いのは知っていたが、今回は長すぎる。そのうち、「いや～、ここはいいとこだ。宿の親父と話し込んでしまったよ。」と言いながら上がってきた。関水さんは誰とも楽しく話し込める特技を持っている。やっと、全員そろっての乾杯となり、話しと酒は尽きることなく続いた。

宿泊者は、後で来た一組と我々だけなのに、やたら人の出入りがあり、それぞれ20Lのポリ容器を持っている。温泉水を汲みに来る人達なのである。帳場に、“温泉水1回100円以上”と書かれてあり、小さな箱が置かれていた。近隣の人達はここの温泉水をふんだんに使っているみたいだ。ここの温泉水は飲用でき、胃腸に特効があると説明されている。それから、ここの宿の館内全ての蛇口から出るのは全て温泉水で、トイレのはてまで温泉水なのである。





春日さんが持ってきてくれた自社製干物、カツオの米酢漬け、カツオの刺身



7月12日(金)

瀬戸瀬温泉—R333—野上橋—R242-R238—紋別—マリンアイランド岡島—浜頓別—エサ
ヌカ線—R238—D1077—D889—宗谷岬—R238—D254—稚内—野寒布岬—D254—童夢
民宿 メイロード (313km)

今日の予定を考えると、湧別川での釣り時間は1時間ほどしかとれない。そのような、ついでの釣りで釣れるほど甘くはないと心得ているのだが、どうしても、狩猟本能のためか、竿を出さずにいられない心境になってしまう。今シーズン初の釣りを湧別川で試みた。

川幅が広く、後ろを気にしなくても良いので、キャストイングを忘れかけたような初心者のフライフィッシングには丁度良い。何度かキャストイングを繰り返しているうちに思い出してきて、フライも遠くに飛ぶようになった。前々日の豪雨のため、少し濁り気味だが、川に立ち込んでの釣りはさすがにいい。川面をゆっくりと流れるフライに集中し、大きな魚がガバツと水面を割って出てくるシーンを期待していると、パンシャツと魚がフライに反応した。すかさず合わせたが全く手応えなし。気を取り直してもう一度流すと、同じところでまた魚がパンシャツと出たが、合わせられない。その後は何度流しても反応がない。完全に魚に馬鹿にされてしまった。片手間の釣りだと、魚に見破られてしまったようだ。



湧別川でのフライフィッシング

釣りは早々に切り上げ、オホーツク沿岸の宗谷国道を、次の目的地のエサヌカ線を目指して、春日さんを挟むように関水さんが最後尾を走った。途中、懐かしい道の駅マリーンアイランド岡島で昼食をとったが、このラインを走る時は不思議といつもここに寄っている。コバルトブルーのオホーツク海が芝生の向こうに広がり、水平線がシャープだ。

【エサヌカ線】

何度走っても飽きることのないエサヌカ線だが、問題は天気だ。今日の天気からすると、地上の道が天空の道に繋がりに、バイクに乗ったまま空に駆け上がるような錯覚に陥ることができそうな期待が膨らむ。何度か直角に曲った後、いよいよ直線がはてしなく続き、空に舞い上がるのだ。この力強い直線の魅力はアメリカ現代美術のミニマルアートの世界か、あるいは東山魁夷の「道」に通じる。ここは途中で止まれない。とにかく終点まで突っ走った。涙が溢れてくる。この道を走るのはVツインに限る。シャカシャカした高回転型のエンジンでは似合わない。走りながらアクセルワークに変化を与え、Vツインの鼓動と、響き渡る排気音に酔うことが存分にできるのはこの道しかない。終点まで走った後、また同じ道に戻り、3人の走行写真を撮った。しかし、このエサヌカ線も数年前と比べると、交通量が多くなってきた。以前は、工事用のダンプがたまに通るだけで、一般の車が通ることはめったに無かった。今回は明らかに旅行者の車が多くなっているところからすると、一般的に知れ渡ってきたようだ。おかげで、走行写真の撮影に邪魔になり、車が途絶えるのを待たなければならなかった。



エサヌカ線の直線路 空に溶け込む





春日

エサヌカ線での走り3様



関水



土門



オホーツク海をバックにダート走行



宗谷丘陵の走行 背景は宗谷海峡



宗谷丘陵を快走するスポーツター



宗谷丘陵から樺太を望む



熟年ライダー3人 土門 春日 関水

【周氷河 宗谷丘陵】

エサヌカ線を行ったり来たりしながら、十分楽しんだ後、宗谷丘陵に向かった。知来別を過ぎて間もなく、今まで何度も通っても見たこともない島々が右前方に浮かんで見えた。この方向はオホーツク海だけで、島などあるはずがない。樺太だ。サハリンの高い山々の上の部分だけが島のように見えていたのだ。そのくらい今日は空気が澄んでいる。宗谷丘陵からの眺めへの期待が膨らんだ。R238からD1077に左折する車は、数年前まではほとんどなかったのに、観光バスを含め、乗用車が多く入って来た。この道は前後に車の無い状況で走りたいので、しばし休憩し、車が途絶えてから走り出した。D889に右折すると、途端に車は見当たらなくなった。どうやら、稚内方面への車が、宗谷岬のバイパスに使っているみたいだ。宗谷丘陵を走っているのは我々だけだ。穏やかな起伏が続く独特の周氷河地形を鼻歌交じりで快適に走った。この景色は何度見ても飽きない。全くの不毛の地なのだが、人間の営みを寄せ付けられない自然の厳しさに、畏敬の念を抱いてしまうからだ。日本各地に開発の波が押し寄せても、ここは自然のまま残る。せいぜい風力発電の風車が林立するくらいだが、風車が一つも無いときの景色が脳裏にある者にとっては、もはやこの魅力は半減した。予想通り、樺太は異様なくらい間近に見える。こども日本の領土だった。樺太を見る度、樺太から引き揚げて来た親戚の4人家族が、しばらく我が家に同居していたことを思い出す。

今日のこの天気だと、利尻岳もきれいに見えるだろうし、日本海への夕陽も最高のはずだと期待しながら走り出すと、もうすぐに利尻の特徴のある山の形が宗谷湾に浮かんで見えてきた。野寒布岬からの夕陽に間に合いそうだ。宿には夕陽を見てから行くと連絡を入れたら、「そのほうがいいよ。食事は着いてから用意するから」と快い返事が返ってきた。野寒布岬に着いてみると、考える事は皆同じようで、夕陽を見ようとする人達が大勢いて、カメラを構えた人達が場所取りまでしていた。もっと静かな、人のいないところで写真を撮りたかったが、間もなく沈んでしまうので今から移動するのは間に合わない。今日の宿の近くの海岸のほうが良かったと思いながらも、人混みから離れたところにバイクを止め、急いでカメラを準備した。真っ赤に焼けただれた熱球が水平線に近づくと、ジュッと音がするような錯覚を覚えるほどの夕陽だ。日没は、完全に太陽が沈んでから広がる空の色の変化も美しい。

民宿「メイロード」は野寒布岬より10分もかからない。懐かしい宿のおばさんが迎えてくれた。夕食の前に、宿の目の前にある日本最北の温泉「童夢」に入ることにした。ここに泊まると無料で温泉に入ることができるのもうれしい。薄い茶色がかかった湯で、少し石油の臭いがするが、肌に特効があり、特にアトピー皮膚炎に効くことで有名な温泉だ。以前、温泉に浸かりながら夕陽を眺めたことがあるし、利尻も見ることができる立地にある。

宿泊客は我々3人だけなので、時間を気にすることもなく、おばさんとの話を楽しみながら酒もすすんだ。



7月13日(土)

民宿「メイロード」—D254—サロベツ原野—D106—R232—おびら鉢番屋—留萌—(深川留萌自動車道)—(道央道)—滝川IC—R38—富良野
ロッヂ・アイガー (321km)

今日も快晴。朝の散歩に、昆布を干すための玉砂利を敷き詰めた浜辺に行ってみると、この時期にしては珍しい利尻岳の残雪が朝陽に輝き、その右に礼文島がクッキリと浮かんでいた。オホーツクの海の色と比べると、日本海の色は柔らかい青色をしている。

今日は3人とも途中から別行動で、宿は富良野のロッヂ・アイガーと決めて走り出した。利尻島に一番近い夕来付近で走行写真を撮ったが、ここは交通量が多く写真撮影は危険だった。

【「北の大地」の活動家・梶原さんを訪ねる】

二人と別れてから、自分はサロベツ原野の梶原さんを訪ねた。ここ数年毎年お会いしているが、改革の姿勢は衰えるどころか、ますます盛んである。サロベツ原野の治水対策をライフワークとして、「サロベツの今を見直す100の声の会」代表として、道庁のみならず、国会まで出向いて精力的に陳情活動をしていると思っていたら、幌延の核廃棄物処理場問題にまで広げて活動していた。そのおかげで、幌延の核廃棄物処理場は白紙になったのである。

梶原さんは、会の代表として、活動記録を「会報」としてA4サイズの両面に詳しく書いて報告している。自分が知っているだけでもその「会報」は76号に及んでいる。それを読んで感じることは、私利私欲は全く無く、そこに住んでい

る人達、人間社会の全ての人間が、気持ち良く生活できることを願っており、利権がらみの思考は微塵も感じられない。ほんの一部抜粋する。最近の原発問題に関して、「…相変わらず“喉元すぎれば…”の国民性なのか、政界・財界の巨大原発推進派がイメージする世論操作によって、そのベクトルがとんでもない方向に突き進もうとしている。…」。

メイロード近くの浜辺より利尻山



民宿・メイロードの名物おばさんと記念撮影





梶原さんが行っている活動は命が幾らあっても足りないくらいの誹謗中傷、そして迫害もつきまとっているようだが、全く怯むことなどないどころか、活動に拍車がかかってくるように思われる。お目にかかる度に、柔和な人柄のどこから、このパワーは生まれてくるのかと不思議に思うほどで、だからこそ歳をとる暇もなく、いつまでも若々しい精神を持続している

のだと思われる。「こんな活動をしていなかったら、今頃サロベツで一番の酪農家になっていただろう」と、冗談半分に話していたが、その通りだと思った。

自分と梶原さんの共通点は、若い頃に、同じ鳥海山を常に眺めながら育ったことである。

手塩の道の駅で休んでいたら、自転車の旅人がやってきた。横浜とカリフォルニアの若者で、横浜からスタートし、三陸沿岸を北上し、青函フェリーで道内に入り、そのまま日本海沿岸を北上して3週間目になると言っていた。自分も46年前に、同じ海岸線を北上したので、「このルートは思いのほかアップダウンがあって大変だったでしょう。俺が走った時は全線砂利道だったよ。」と言ったら、「それはすごい！」とビックリしていた。久々に会う骨のある青年だ。ほぼ完璧に野宿をしてきたと言い、「稚内まで行くのに、海岸ルートと国道40号沿いの内陸ルートとどっちがいいですか」と聞いてきたので、「文句なしに、海岸の106号を行って、今から自転車で行くことを考えると、「こうほねの家」のパーキングがテントを張るのに最高だよ。トイレも水もあるし、砂浜もすぐそばだし、なんと言っても夕陽が今日はきれいだよ。」と教えたら、すごく喜んでた。



R232のオロロンラインは単調な景色が延々と続く。最初にバイクでこの道を走った時、涙を流しながら走ったのだが、もはやその感激は失せてしまった。なにせ交通量が多くなり、人工的構造物が多くなりすぎた。とは言っても、本州と比べたら、比較の対象にならないくらいなのだが。そして、このルートは相変わらずライダーが多い。頻繁に挨拶しなければならない。挨拶にも、大きく分けると2種類ある。あげた手を大き

く振るタイプと、気取ったように敬礼ぎみにあげるタイプに分かれる。自分はその時の周囲の雰囲気と気分によって変わる。場合によっては、あえてしない場合もある。

おびら鯨御殿の近くで、真っ黒に日焼けした単独の女の子のチャリダーと出会ったので、手を振って励ましたら、白い歯を見せながら笑って応えた仕草が可愛かった。46年前、自分が自転車で走っているとき、トラックは追い越してからクラクションをならすのが常だった。当時はほとんどの国道は砂利道で砂埃がひどく、「ゴメン」という意味と、「頑張れ」という励ましの意思表示だったと思った。自分もバイクで自転車を追い越す時は、スピードを緩め、追い越してからゆっくりと手を振ると、バックミラーに、手を振って応えてくれる姿が写っていた。



106号線での3人の走り





最短距離の夕来より利尻山を望む こんなに鮮明に見えたのは初めて





106号線



いつもながら、ロッヂ・アイガーに着くと、我が家に着いたような安心感を覚える。ほどなくして、春日さんと関水さんが一緒に到着した。結局、二人は羽幌から旭川経由で一緒に走ってきたのである。今晚の夕食は「北の国から」で有名になった「くまげら」を予約していた。観光シーズンで店は混んでいたため、二階の雰囲気のない席に案内された。早速、この店に来たからには必ず注文する“山賊鍋”を食べたが、何度食べてもこの味は飽きることがない。春日さんと関水さんも「これは旨い」と唸ったほどである。帰り際、マスターを呼んで久しぶりの挨拶をしたが、「もっと早く声を掛けてくれれば良かったのに」としばしお話をすることになった。大病をしたとは思えないほど元気そのもので、以前より健康的に見える。もうかれこれ十数年の付き合いになり、富良野に来た時は、この後行く「雛」とともに必ず行くことになる。

いつもそうだが、「雛」で飲む頃は、疲れのために酔いが一気に回ってくるのだが、ここも開店当初から来ているし、ママの友紀さんとはその前の店からの付き合いだから、安心して飲める。そんなわけで、いつも「雛」での次の日には、あまり記憶が無くなっているのが常である。



7月14日(日)

ロッヂ・アイガー — 麓郷—原始の泉—布部—山辺—国分農園—ロッヂ・アイガー (80km)

【国分農園の富良野メロン】

ある時、春日さんはつぶやいた。「言わせてもらうけど、あんたはひどい」と。何のことかと神妙になって話を聞くと、「自分だけ、あんなにおいしそうにメロンを食べるなんて」、ということだった。これは、富良野メロンを食べてもらわないと一生言われると思い、今回のツーリング中に実現させようと考えていた。昨年、おいしい富良野メロンをいただいた国分農園にコンタクトをとって行ってみると、国分さんは冷やした赤肉と青肉の2種類の富良野メロンを用意して待っていてくれた。赤肉は濃厚な甘みで、青肉はあっさりとした甘みに上品な味でどちらもおいしい。昨夜のように飲み過ぎの翌日は青肉のメロンが体に合う。ここ山辺のメロンは、一日のうちの寒暖の差が大きいためか、糖度が高くおいしい。春日さんと関水さんは貪るようにメロンにかぶりついたが、ここのメロンを食べると、誰でも満ち足りた顔になる。そして、メロンの自家製アイスまでご馳走になったが、まるで本物のメロンを食べているような濃厚なアイスだった。満足してもらった後、3

人それぞれの道を走るようになった。春日さんは層雲峡へ、関水さんは日高方面へ、自分は明日の登山に備えてロッチ・アイガーへと向かった。3人で一緒に旅をするのもそれなりに楽しいが、登山も旅も醍醐味は単独行にあると思う。ましてや、この3人のように馴れ合いにならず、我が道を行くような私の強い人達の場合は、一緒に行動するのは3泊ぐらいが丁度良い。今回は、この3泊4日の旅の内容があまりにも良かったので、気持ち良く、それぞれの道に進むことができた。



富良野メロンにかぶりつく3人と国分さん バイクは国分さん所有

7月15日(月)

ロッヂ・アイガー(4:00)——十勝岳温泉(4:50)(5:10)・・・コル(8:35)・・・富良野岳【1912m】(9:08)(9:15)・・・コル(9:45)(10:00)・・・三峰山【1866m】(11:05)(11:20)・・・上ふらの岳【1893m】(12:20)(12:55)・・・上ホロカメツク山【1920m】(13:15)・・・上ホロ避難小屋テント場(14:10)

【十勝連峰から大雪山への縦走】

縦走登山の場合、登山口と下山口が異なり、その距離が大きければバイクは宿に置いて行った方がよい。前日予約しておいたタクシーで十勝岳温泉の登山口まで行ったが、駐車場はもう既にほぼ満杯状態だった。歩き始めて間もなくもう雪渓が現れてきた。今年は残雪が多いと言うのは、間違いではなさそうだ。今日狙う最初のピークは、花の山で有名な富良野岳である。朝陽に輝く富良野岳が目の前に聳えている。それにしても、やけに背中ザックが重く、肩に食い込む。あれもこれもと5泊6日分を詰め込みすぎたかもしれないが、今更下ろすわけにもいかないので行くしかない。だらだら登りがやたら長く感じられたが、急に視界が開けてコルに到着した。ここに荷物をデポし、カメラだけを持って富良野岳に急いだ。

確かに花の山ではあるが、トムラウシ山周辺の花畑を知ってしまった者には、あまり感動するものではない。頂上からは、十勝岳とその背後に続く大雪連峰が一望できると同時に、今回のゴールの遠さに気が遠くなった。コルまで一気に下り、未知の領域の三峰山の登りにしたが、今までの登山者が嘘のようにいなくなった。ほとんどは富良野岳の登山だけだったのだ。やっと静かな山歩きができたが、三峰山の登りは以外ときつく、どれがピークなのかわからないほどピークを越えたが、最後のピークが頂上だった。

上ふらの岳まで来れば、今日のテント場は近いので、気持ちにも余裕がでてきた。上ふらの岳を下ったコルにザックをデポし、上ホロカメツク山の危なっかしい頂上に立ったが、目指す避難小屋は見えない。デポしたところに戻り、避難小屋への迂回路に入ったが、意外なことに雪解け直後の雪渓の跡にはエゾツガザクラ、チングルマなどが花盛りであった。十勝岳周辺には珍しい小さなブッシュ帯を抜けると稜線に出て、十勝岳が真正面に望まれ、稜線から下った大きな雪渓の向こうに避難小屋が見えた。上ホロカメツク山の頂上から見えなかったのは、頂上にあまりにも近く足下が見えなかったのだ。これだったら、テントを張ってから空身で登った方が楽だった。小屋の前で、小屋泊まりの4人が寛いでいたが、テント場には誰もいなかった。重いザックから解放されて、自家製サルナシ酒をグビりと一気に飲み、風向きを考え、明日登る十勝岳が望まれる場所にテントを張った。かなり早めに着いたので、明日登るルートが見えるところまで少し登り、ルートを確認しておくことができた。この地形だとガスがかかったら方向感覚が麻痺して進めなくなってしまう恐れがあるので、このルート確認は明日のために役立った。その後、小屋泊まりの人に水場を聞いて、水汲みに行ったが、雪渓が融けたばかりの跡に、大好きなエゾコザクラが敷き詰められたかのように咲いていた。辺りがピンク色に染まるような密度の濃いエゾコザクラの群落は初めて見た。

今晚のメニューには無かったが、なぜかラーメンが食べたくなったので、急遽、ラーメンと親子丼にした。サルナシ酒を一口飲むごとに、今日の疲れが全身から抜けていくような気になる。この至福の一時のために重いザックにも耐え、歩き続けてきたようなものだ。食べ終わらないうちに、今までの好天が嘘のように、急にガスがかかってきた。そんな中、今回も又、奇人の部類に入る登山者がやって来て目の前の少し離れた所にテントを張った。地下足袋姿に、菅笠ではなく、なぜかカーボーイハット、木の枝をストック代わりに、テントの支柱は、先が二股に分かれている細長い木の枝2本だけ、テントはカーキ色の昔のテントで、ビバ

ーク用のツェルトのように無造作に立てた。「ご苦労さん。なかなかクラシックな出で立ちですね。」と声をかけると、「ワシヤ、現代人ではないからな。」と飄々としている。歳は70は超えていると思われるが、以外と見かけより若いのかも知れない。サルナシ酒の酔いも回ってきたし、明日はかなりのハードな行程なので寝ることにした。

うとうとしかけた頃、テントにポツリポツリと雨音がしてきて、やがて本格的な土砂降りになり、風も強まってきた。今回は、5泊の間には必ず雨に降られる日があると思い、フライシートを用意してきているので雨は大丈夫だが風が気になる。ペグだけでは不安なので、ペグの上に大きな石を置いてあるので大丈夫だろうと思いながら、向かいのテントが気になり覗いてみたが、テントは立っているものの、風に煽られてペシャンコになっている。テントで食事をした気配もなかったので、小屋に避難したのかもしれない。



登り始めて間もなくの雪溪



朝陽に輝く富良野岳



富良野岳頂上より十勝岳 その左後方に今回のゴールの大雪山連峰



雲海の彼方に芦別岳(右)、夕張岳



十勝岳遠景とお花畑



上ふらの岳頂上



上ふらの岳頂上より、今日歩いてきたコース 遠景は富良野岳



爆裂火口の一部



上ふらの岳よりカミホロカメツク山を望む 遠景は十勝岳



カミホ口避難小屋への迂回路付近のお花畑



キバナシャクナゲの群落



稜線より望む十勝岳 手前に避難小屋が見える テン場はその陰



ガスが立ち込めてくると、インナーダウンを着ないと寒い 暖かいラーメンがおいしい



周りがピンク色に染まるほどのエゾコザクラの群生

7月16日(火)

上ホロ避難小屋テント場(5:20)・・・十勝岳【2077m】(7:00)(7:20)・・・コル(8:10)(8:20)・・・美瑛岳分岐(10:20)・・・美瑛富士分岐(11:00)(11:20)・・・美瑛富士避難小屋(12:00)

朝、目を覚ますと、向かいのテントの人が撤収作業をしながら話しかけてきた。「さっきまで晴れてたんやけどな～。この辺で有名な花や、なんていうたかな～」、「山の花ですか。」、「いやいや違う。有名な花や」、「ラベンダーのことかな」、「そや、その花はどこへ行けば見られるかな」、「下に降りればどこでも見られますよ」、「そうか、ほんな、ありがとう」、と関西訛りで喋り、濃霧のなかに消えた。

昨日、ルートを目視していてよかった。ほとんど見えないほどの濃霧が立ちこめているなかを、昨日見たルートを頼りに登り始めた。しかし、歩き始めて間もなく、濃霧は瞬く間に消え、厳しい真夏の日差しが戻ってきた。ゆっくりと十勝岳への登りについたが、地面の至る所に開いている小さな噴気孔から、水蒸気が吹き出ている。活火山のまっただ中を歩いているのだ。背中のザックは相変わらず重いが、誰もいない静寂のコースを、高度計を時々見ながら一步一步を進めるうち、以外と早く頂上に着いた。今日の十勝岳登頂一番乗りと思っていたら、先客一名が頂上で食事をとっていた。どうやら、随分早くに登り始めたようだ。



この稜線を詰めると十勝岳頂上



無数にある小さな噴気孔の中を登る



十勝岳(2077m)登頂



振り返れば、富良野岳(奥)から歩いてきた稜線が一望



十勝岳頂上を少し降りた所 果てしなく死の世界が広がる



生命の存在は無く、風雨による縞模様が不気味 遠景の尖りは十勝岳

【縦走断念】

頂上からは、昨日富良野岳から歩いたコース、そして、これから歩くコースが一望できる。これから歩くコース上には緑が全く見当たらない。生命体が全く存在しない死の世界が広がっているが、リセットされた状態の可能性への魅力なのか、心引かれるものがある。美瑛岳手前の東斜面で、思いがけずに見事なお花畑を目の当たりにしたとき、極端な対比を見せつけられ、豊かな生命観を実感した。しだいに天候が怪しくなってきた。このコースで一番避けたいガスが多くなってきたのである。一時は周囲が全く見えなくなり、黄色いマーカーを頼りに進むしかなかった。美瑛岳分岐で、頂上に行くか行かないかで迷った。頂上に行けば往復30分の時間がかかる。自分はピークハンターではないので、ガスで視界のきかない頂上に立つより、これからの行程を考えてパスした。しかし、美瑛富士分岐での通過時間をみると、予定より1時間遅れている。これより最大の難関のオプタテシケ山を越えなければならない。順調に行っても双子池テント場に到着するのは早くも5時だ。双子池テント場は、避難小屋のないテント場なので、何かの時に不安がある。それに今年は残雪が多く、テント場がはっきりしているかもわからないし、ここから先はエスケープルートがない。天気予報は確実に下り坂で、これから行く方向は、既に真っ黒になったガスで不気味に覆われている。重すぎるザックも不安の種だ。単独行の場合、より慎重にならざるを得ない。これより先に進むことは断念し、今晚は美瑛富士避難小屋に泊まり、当初のエスケープルートにより、明日、白金温泉に下山することにした。ここから先は、来年の楽しみにしてとっておくことにした。

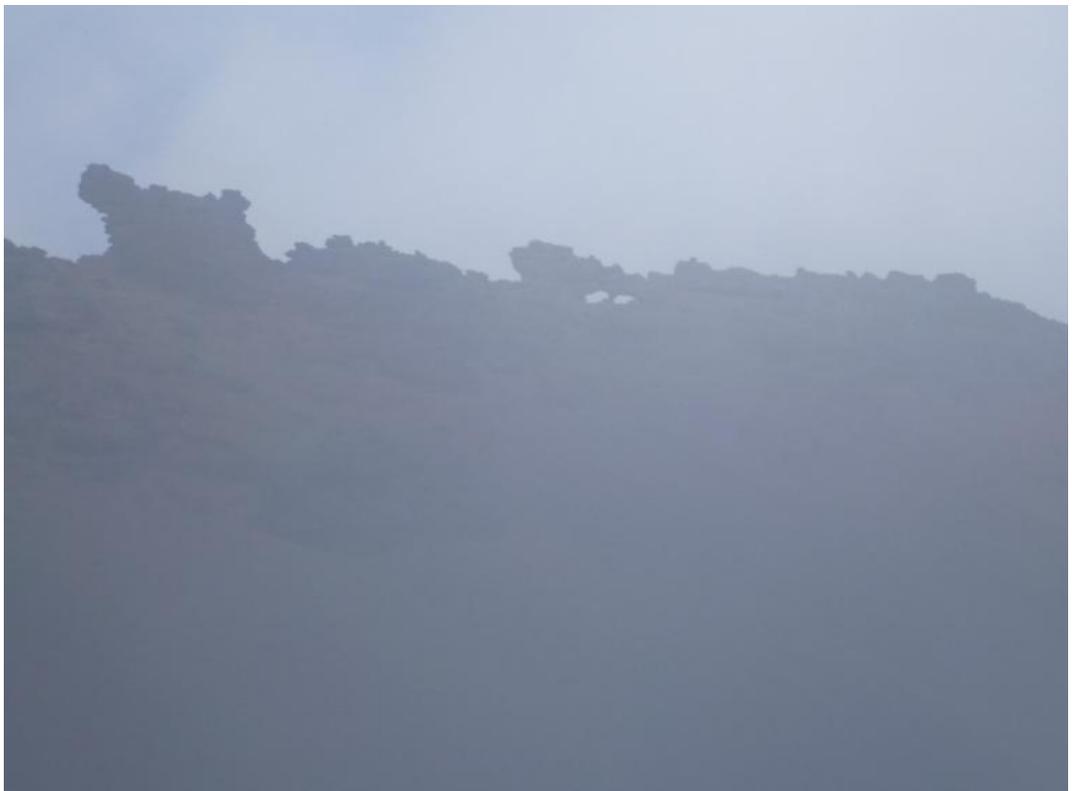
今晚は雨の予報なので、テントは張らず、避難小屋に泊まることにした。先客が一人いて、掃除をしているところだった。前日、双子池キャンプ地にテントを張ったというので、状況を聞いてみると、今年は雪が多く、本来のキャンプ地はまだ雪の下で、その近くの適当な所に張った、と言っていた。そして、オプタテシケの登りで残雪が多く、夏道のルートを探すのに40分もかかり、すっかり体力を消耗してしまい、本当はカミホロのキャンプ地まで行く予定だったが、ここに泊まることにしたと話していた。自分と逆パターンの人で、この話から推測すると、あのままオプタテシケに挑んでいたら、日没が迫ってきてかなり苦労したに違いない。ましてや雨でも降られたら、逃げ込む避難小屋もないので悲惨な状況になったかも知れない。来年のために良い参考になった。

一休みした後、先客の人に教えてもらって水を汲みに行ったが、最初の雪渓まで15分はかかったし、登山道が荒れていて歩きにくい。雪渓はあるものの、水を汲めそうな所を見つけることができない。やっと見つけたが、浅い水溜まりだった。コップを持ってこなかったのが2Lの容器に一杯にするのに時間がかかった。この水場はかなり不便だ。小屋の周辺はお花畑になっているので、のんびりと撮影しながら彷徨うのも気持ちが良いが、ガスがかかって風もあるので、インナーダウンを着ないと寒い。キバナシャクナゲの群落が終わりかけて、花が薄茶色になってきていたのが残念だったが、珍しい斑入りハクサンチドリを見つけた。

結局、6人の登山者が泊まることになったが、自分以外は双子池キャンプ地からの人達で、先客の人と比べると、到着時間にかなりの差がある。このことからしても、今年のように残雪が多い状況では、カミホロキャンプ地から双子池キャンプ地まで行くのは無理だったようだ。大学生の二人は、来月、鳥海山に登る予定と話したので、「自分の古里の山で、いい山だから、是非ともチョウカイフスマを見てきて」と言った。



これから行く稜線のガスの彼方に美瑛岳が聳える



ガスに覆われた稜線に現れた“竜”



黄色のマーカ―(右手前)を頼りに進む



束の間の晴れ間に見えた美瑛岳



美瑛岳手前東斜面に局地的に広がるお花畑





美瑛富士避難小屋手前の大きな雪渓



美瑛富士避難小屋



チングルマ

斑入りのハクサンチドリ



避難小屋周辺のお花畑



キバナシャクナゲ

7月17日(水)

美瑛富士避難小屋(5:35)・・・美瑛富士登山口(9:40)(9:55)・・・湊沢林道ゲート(10:25)
(10:45)・・・白金温泉(11:15)(13:07) —バス—美瑛駅(13:45)(14:16)—JR—富良野駅
(13:00)—バス—ロッジ・アイガー(15:20) ロッジ・アイガー

達成感のある下山と違って、身も心も重く、ザックもやたら重く背中に食い込み、挙げ句の果て、登山道が最悪で、雪解けによりドロドロで滑りやすく、土が流されて大きな石だけが残った、歩きにくい登山道をひたすら下った。途中、一人の登山者と出会ったので、「大変な登山道ですね」と声をかけたら、なにを尺度で判断しているのかわからないが、「いやあ、ここは一級国道ですよ」という言葉が返ってきた。しばらくして、ノコギリと鉋を持った人が登ってきた。美瑛山岳会の会員で、今シーズン初めての登山をしながら、登山道の整備をしているとのこと。今年は残雪が多く、なかなか山に入れなかったと言っていた。双子池キャンプ地の様子を聞いてみたら、「あそこはキャンプ地としては適さなくなった。土砂の流出が激しく、快適にテントを張れるところがなくなった」と言っている。ということは、もう少し先のコルのほうが適しているのかもしれない。やがて道は傾斜が緩くなり、まともな歩きやすい登山道になり、まもなく登山口に着いた。しかし、ここから延々とアスファルトの林道を歩かなければならない。結局、美瑛富士避難小屋から白金温泉のバス停まで6時間弱かかってしまった。バスまで2時間近く時間があつたので、温泉に入って汗と汚れをきれいに洗い流した。普通は、温泉に浸かっていると、達成感がジワジワと湧いてくるのだが、それはない。生ビールを飲みながら「ぶっかけそば」なるものを食べたが、意外においしかった。

ロッジ・アイガーに着いてから、気になったザックの重さを計ったら23kgあつた。ということは、水2Lと2泊の食料などを加えると25kgはあつた。これは少々重い。アイガーの佐藤さんに「いい人がいるからマッサージしてみるかい」と言われ、お願いすることにした。マッサージというより指圧師というかんじだった。痛いのを必死に我慢して耐えていると、「我慢して協力してくれてありがとう」と話しかけながら、2時間以上、足裏を中心にツボを押してもらった。そのおかげか、全身が軽くなった。



7月18日(木)

【完全休養日】



今日は完全休養日。洗濯、山道具の整理梱包発送作業をしたりしながら、アイガーでゴロゴロして過ごした。アイガーの真正面に見えるはずの十勝連峰の山並みは全く見えなく、風が強い。昼食に近くのレストランに歩いて行って、富良野名物の黒いカレーを食べたが、その後胃の調子が悪い。食後の散歩をかねて小さなラベンダー畑を見たのだが、ラベンダーより興味のある花を見つけた。あまり見かけない青の色が魅力的な花だが、アイガーの佐藤さんも、レストランのオーナーも名前がわからない。

ウトロの大宮さんに電話をして、予定よりも早くウトロ入りすることを連絡した。

7月19日(金)

ロッチ・アイガー(10:00)—R237—D759—D581—D70—D580—R452—D68—D37—D140—当麻・オートオアシス(11:30)(12:00)—愛別IC—旭川紋別自動車道—上川層雲峡IC—R39—北見西IC—北見道路—北見東IC—D122—R334—斜里—ウトロ(5:10)

大宮さん宅 (258km)

ラベンダーの時期は、渋滞が予想される美瑛を避け、旭川も郊外をパスし、いつもこのルートを通る時は必ず休む当麻ロード・オアシスに寄った。このPAは広々とした施設で、売店、トイレ、公園などがあり、大きなグランドゴルフのコートに隣接している。ここに車を止めて宿泊する旅行者が、全国から集まってくる。数年前から顔馴染みになった売店の女性に会いにいったら、相変わらず元気のよい笑顔で迎えてくれた。いつも、ここでたわいも無いことをお喋りして疲れをとり、また走り出す。今回初めて写真を撮らせてもらった。



三国峠(1139m)が開通するまでは、道内最高所だった石北峠(1050m)は、何度通っても懐かしさが込み上げる道路だ。学生の頃、自転車での峠を越え、30数キロに及ぶ下り坂で、ブレーキレバーをにぎり続けたため握力が無くなり、必死の思いで腕全体を背筋で引っ張ってコントロールしたことを思い出す。

【大宮さん、大瀬さんとの再会】

ゆとりを持って走りすぎたため、ウトロの大宮さん到着予定時間は過ぎてしまうことに気がつき、斜里までの最短距離の国道334号を飛ばした。キャブレターのフィーリングは相変わらずだが、Vツインのエンジンは快調そのもので、緩いアップダウンが続く斜里の畑作地帯に独特の排気音を叩きつけながらも、右手に少し雲がかかった斜里岳、正面に姿の良い海別岳、左手に知床連山を眺める余裕も持ちながら、ほとんど休憩しないで走り続けたため、以外と早く大宮さん宅に着くことができた。今年もバイクは大瀬さんの車庫に入れさせてもらったから安心だ。再会を喜び、早速風呂に行くことにした。風呂といっても近くのホテルノーブルの温泉である。いつものようにフロントを顔パスで通り、7階の展望風呂に行った。ウトロ港のオロンコ岩を見下ろす浴槽にゆったりと浸かり、今日の後半飛ばしたことによるストレスを解放することができた。温泉の後、大瀬さんともお会いして、明朝6時出発と、打ち合わせをした。



上からズワイのむき身、メヌケの刺身、メヌケの煮付け

夕食は高級魚メヌケの煮付けと刺身、剥きタラバガニと、その量が半端でない。全部食べることは不可能。そして、越乃寒梅まで用意してくれた。メヌケの煮付けは勿論旨いが、甘みと腰のある歯ごたえの刺身が思う存分食べられたが、それでも半分ほど残してしまった。



大宮さんと夕食

7月20日(土)

【一年ぶりのルシャ番屋と予期せぬアクシデント】

迎えに来た大瀬さんと6時頃大宮さん宅を出発した。ここからルシャ番屋までは1時間少々であるが、大瀬さんの貴重な話を聞きながらなので、あまり時間を感じさせない。特に、熊の話は大瀬さんならではの話しの内容になる。大瀬さんは、自分で実際に見たことを基にしたの話しか話さないで、全て真実である。従って、知床の熊は全部でどのくらいの数が生息していますか、というような質問には「わからない」と言う。推測で物事を考えようとはしないのである。熊の出産も冬眠中というのが定説だが、9月頃に出産しても、冬眠するまでに体力をつけることができるとか、熊の交尾は6月頃と言われているが、9月でも見かけると言っている。「発情期がいつでもOKなのは、人間とニワトリぐらいなものだ。」とも話していた。知床に鹿が増えすぎて起こった問題、それに関連して、植生の変化などの話を聞かせてもらっているうちに、今まで険しい山岳地帯を走っていた車は海岸線を走るようになり、ルシャの番屋はもう近い。

1年ぶりの番屋は何も変わってはいない。炊事のおばさんに「今年もよろしくお願いします。」と挨拶をし、漁師達へのお土産をお願いした。去年、顔見知りになったNHKのカメラマンが、「今年は熊が少なく、そろそろ帰ろうと思っているんだ」と話していた。荷物を下ろし終わった頃、そのカメラマンが走ってきて、「親子熊がそこにいる」と教えてくれた。その少ないという熊が、突然番屋の前に現れたのである。チャンスを逃さないようにとカメラを取りに走った。カメラを置いてある所までもう少しのところで、両足がロックされた状態になり、前方にダイビングするように大転倒してしまった。右小指に激痛が走り、出血もひどい。番屋のおばさんが「このあたりは熊やらキツネとかがウロウロしていて、いろんなバイ菌があるので早く消毒をしたほうがいいよ」と消毒液を持ってきてくれた。小指の骨が曲がった状態になり動かないことから、脱臼したようだと思った。素人では手に負えないので、医者に行かなければならない。今日は土曜日のため、ウトロの診療所は休診なので、斜里まで行かなければならない。連れてきてもらったばかりの大瀬さんに、またウトロまで乗せてもらうことになった。本当に申し訳ない気持ちと自分の不注意をものすごく悔やんだ。転倒の原因は、登山靴の紐を結ぶときに、上まで完全に結ばないで、半分の所までしか結んでなかったため、余った紐が反対の靴のフックに引っかかったため、両足ロックになってしまったのだ。登山をするのではないから、という半端な考え方が原因になったのだが、つくづく自分の考えの甘さに嫌気がさし、落ち込んでしまった。

大瀬さんが、番屋から衛星電話で話していたようで、大宮さんが車を用意して待っていてくれた。番屋は携帯が圏外。電話では怪我の様子がわからなかったため、救急車を用意しようかとも思ったと話していた。大瀬さんから大宮さんにバトンタッチしてもらい、斜里の病院に連れて行ってもらった。写真を撮ったら、やはり脱臼していた。外れた骨が内側から皮膚を突き破ったような裂傷だった。「出血を止めるために縫うことは縫うが、麻酔なしでやるか、麻酔の注射も結構痛いからね。どっちにする」、「少しでも痛くないほうでお願いします」、「消毒するのを忘れた。これで何とかなるだろう」と不安にさせておいて、麻酔の注射をし始めたが、一カ所だけではなく、5、6カ所も刺されて結構痛かった。「これで大丈夫かな。一応応急処置だからね。」そして、「ここでは脱臼の修復はできないので、網走の専門医を紹介するから、そこに行ってみなさい」

と言われ、付き添ってくれた大宮さんをお願いして、網走まで連れて行ってもらうことになってしまった。

網走の病院では、「ちょっと痛いからね」と修復したが、ゴキッという音がして戻ったようだが、ちょっとなんていう痛さではなかった。そして、「前の病院で、応急処置の仮縫いと言われたのですが」と言うと、「これでもいいんじゃないの。来週の火曜日又来なさい」と軽く言われた。結局、小指はアルミの添え木を入れられ、大げさに包帯でグルグル巻きにされた。火曜日まで通院しなくてもよいので、厚かましいのは承知の上で、大瀬さんをお願いして、午後にまた番屋に連れて行ってもらうことにした。今朝、大瀬さんは自分を大宮さん宅まで送ってから、別件でまた番屋に行ってきたというから、1日のうちに、標高差350mの連続するカーブのダートを2往復半したことになる。ほとんど毎日運転しているということもあって、路面の穴ぼこ、邪魔な石などは全部頭の中に入っているような運転をする。とても77歳の運転とは思えない巧みさだ。それにしても、番屋生活をしたい一心で、人の迷惑顧みず、怪我にもめげずにとんぼ返りをすると、自分の図々しさに呆れた。更に、このくらいの怪我で済んだことは、不幸中の幸いと思わなきゃと、気持ちの転換を図るあたり、我ながらしたたかな一面有りと思った。

番屋に近づくと大きな熊が目の前に現れた。車を止めてもらって数枚撮った。少し行くとまた海岸に熊が出ていた。番屋に着くまで5頭の熊と出会った。

番屋のおばさんに、「お騒がせして申し訳ありませんでした。23日までよろしくお願ひします。」とあらためて挨拶をした。番屋は今日から24日までお盆休みになったので、漁師達はいない。そこで、その間の留守番として、自分は雇用されて来たことになっている。今晚はカメラマンと、長く留守番をしている藤原さんと、大瀬さんと自分だけが、番屋の夕食は早い。食後に熊ウオッチングに出かけてみると、親子熊を含め、海岸線に結構現れていた。



大きな熊が歓迎



海岸の単独熊

熊の近くに鹿もいるが、10mの距離があればシカは大丈夫
と大瀬さんが話していた



石をひっくり返して虫を食べている

7月21日(日)

3時55分起床。5時朝食。食後すぐ出かけると、大きな熊が座ってこちらの様子を伺っていた。敵意は持っていないような顔をしている。よく見ると愛嬌のある表情をしていて、去年もいたような、見覚えのあるような顔をしていた。ルシャ川の手前のテッパンベツ川の橋のすぐ下で熊が泳いでいる。豪快な泳ぎだが、犬かきならぬ熊かきだ。ルシャ川を渡った所で、藤原さんが山側にカメラを構えていた。親子熊がいた。草の陰で見づらいが、バリッポリッという音がする。藤原さんは、「鹿を子供に食べさせているところだ」と言っている。親が噛み砕いて、子供が食べやすいようにしているのだ。

昼食が10時15分は早すぎるが、朝が早いので食べられた。その後、2時過ぎまで昼寝をしたが、空気がおいしく、喧噪とはほど遠い環境では気持ち良く寝られ、起きた時がスッキリしている。話し好きなおばさんと少し話したが、自分が学生時代にお世話になった石沢さんは膀胱癌で、最後まで番屋にいたいと思っていたこととか、「大宮さんは本当にいい人だよ」と何度も話していた。

午後、走り始めてすぐ、大きな熊がこちらに向かって歩いてきた。至近距離で少し怖かったが、恐る恐る窓を開けて写真を撮っていたら、前方から車が来た。熊はビックリして道路から外れた。あげくのはて、カメラを構えた人が降りてきたので、熊は海岸の方まで逃げて行った。無神経な人達だ。車には確か「知床財団」と書いてあったと思った。その後、めぼしいところを走り回ったが、熊どころか、あれほどいた鹿も全く姿が見えない。今日はそんな日なのだと諦めて、ルシャの川と山と海を眺めていた。



ルシャ番屋 中央が宿泊棟

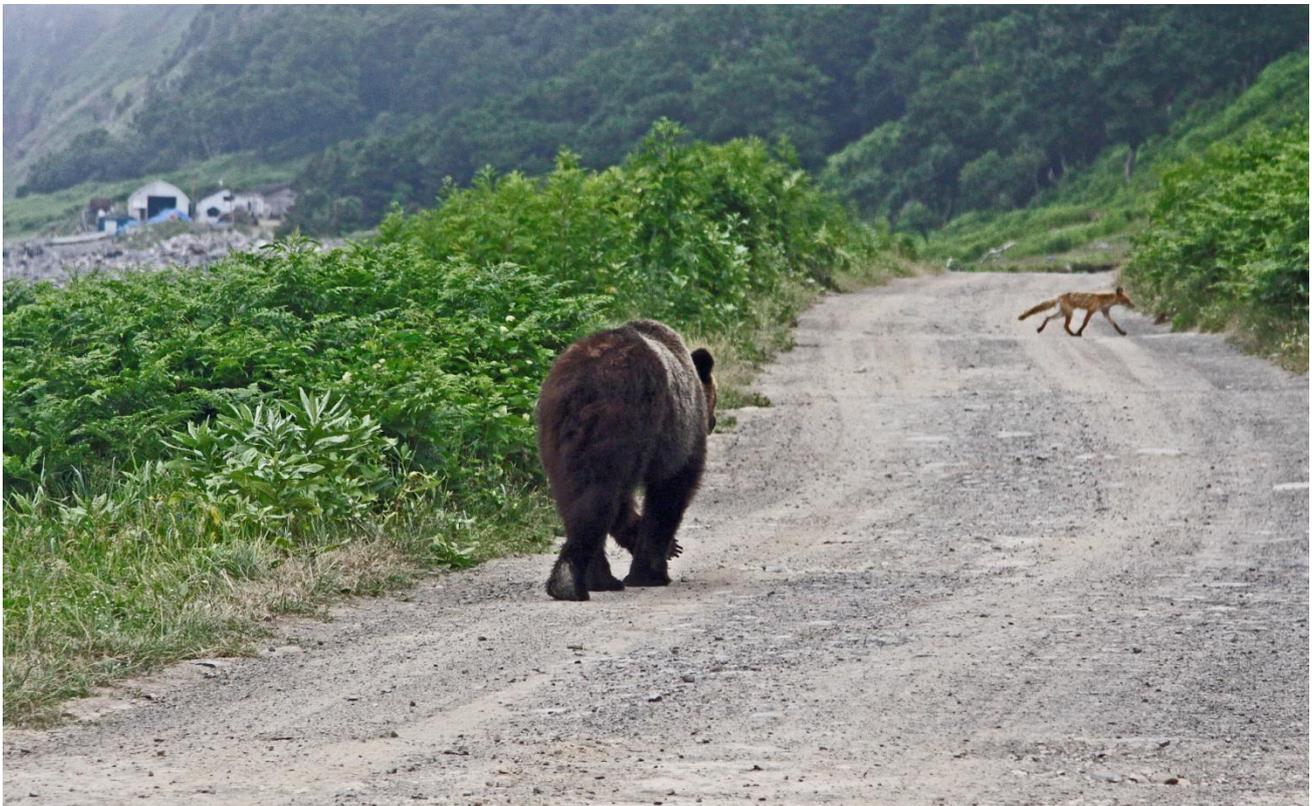
遠くのほうで、藤原さんが、こっちのほうに來いと手招きしている。かなりのラフロードに少しビビリながら入っていき、藤原さんが指さしている方向を見ると、海岸に夕陽を浴びた大きな単独の熊がいた。迂回してこの方向から撮ると良いよとも教えてくれた。おかげでビデオと写真とも撮れた。余計な事は話さない人だが、根はほんとうに優しい人だ。自分が風呂に入るときも、手が濡れないようにとビニール袋を用意してくれた。五右衛門風呂の風呂上がりのビールはことのほか旨い。

座ってこちらの様子を見ている顔なじみの熊





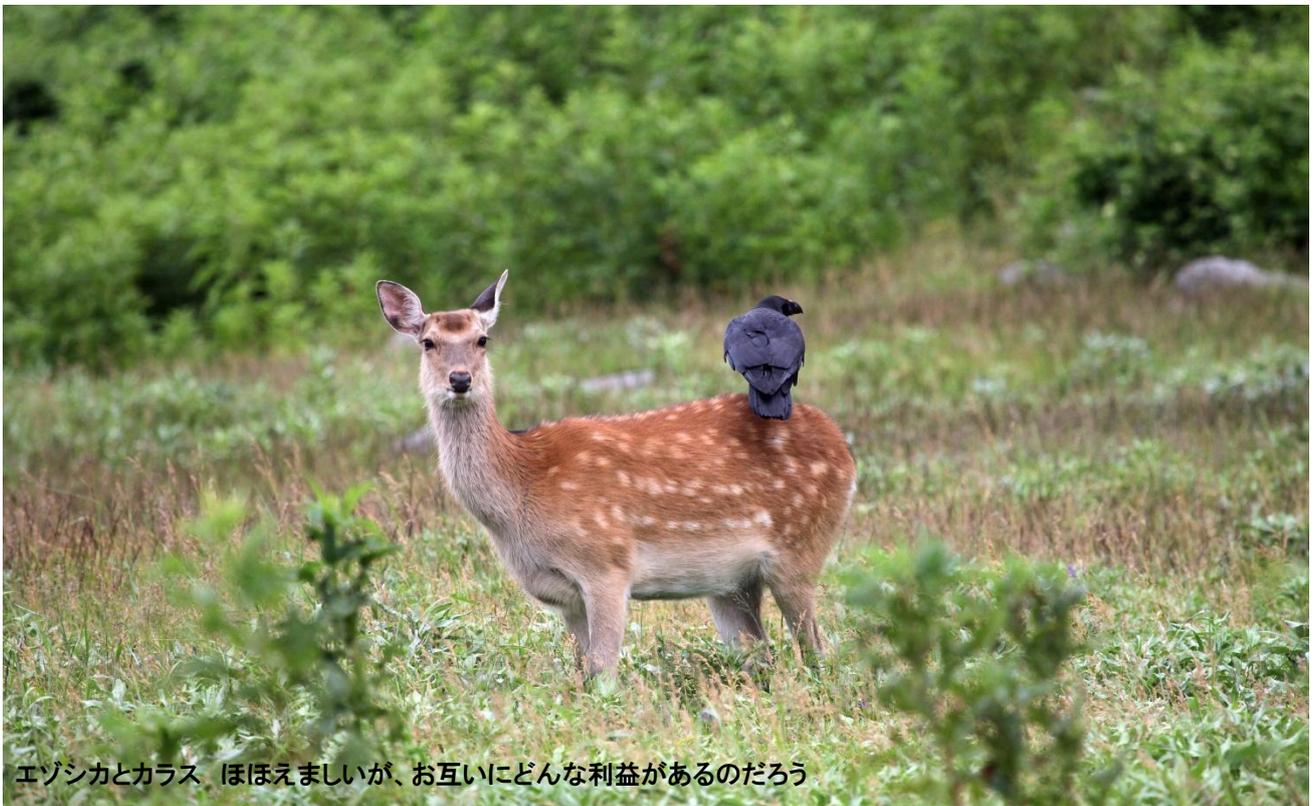
原始の川ルシャ川



道を闊歩する熊 キツネが逃げた



大きな熊が歩いてきた 威風堂々



エゾシカとカラス ほほえましいが、お互いにどんな利益があるのだろう



熊の泳ぎ





番屋の波止場



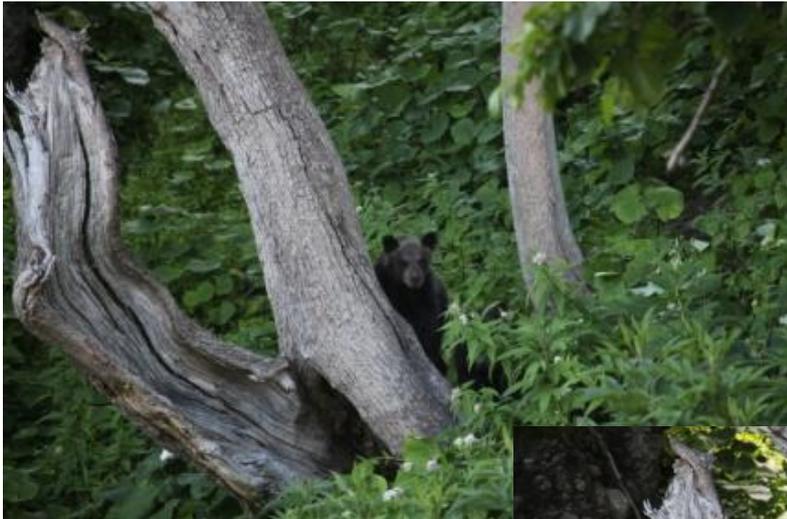
ルシャ番屋遠景(右)



立派なエゾシカのオス 後ろにメスがいる



番屋周辺が縄張りのキタキツネ



子熊の木登り



シカを子供に食べさせている母熊





急斜面で草を食べるシカ シカ道がついている



夕陽を浴びて金色に輝く単独熊



ルシャ川河口の日没

7月22日(月)

今朝は、沖にしかけた鱒網をおこすために全員が船で来て、番屋で朝食を取り、当番の4人を残して帰る予定だ。4時頃起きて洋上を眺めていると、沖合で作業をしているのが見える。その作業のため、今朝の朝食は6時頃となった。相変わらず食べるのは速い。おぼさんが、「1時間かけて作ったのを5分で食べる」と言っていた。そして、2,3分休憩したと思ったらすぐに仕事にかかる。今朝の鱒網で捕った鱒は、沖の生け簀に入れておき、まとめて大型船で運ぶようだ。陸での仕事も、それぞれの持ち場の仕事を機敏に無駄の無い動きでこなしていく。誰一人として手を抜くことはない。

ルシャ川を渡ったところで、単独の熊を見つけ、海岸線伝いに写真を撮りながら番屋近くまで追いかけたが、熊の歩きは想像以上に速い。その後、親子熊を見つけ、テツパンベツ川を渡るところを撮ろうと先回りして待っていたが来なかった。どうやら、行く手に単独の雄熊がいたため、川を渡らずに山手に入っていったようだ。その親子を追いかけたら、木の下で授乳を始めた。下草が邪魔で撮りにくいので、しばらく待っていたら親子とも寝てしまった。

昼寝の後、また出かけたが、熊は出ていない。半島が一望できる気持ちの良い場所に車を止めて、知床の海と山を眺め、満たされた気持ちになって帰ることにした。番屋近くで、道の左側に親子熊がいた。慌ててカメラを用意して撮り始めたら、道を先導するように歩き始めた。熊に先導してもらうことはなかなかできないことだ。道の右側に入って木の陰に隠れたなと思って近づくと、6,7mのところにいる。正直怖かった。車で後を追ったのでストレスがたまり、襲うかもしれないという不安がつつた。こちらには気付いているが、警戒心を見せる素振りはなかった。

番屋に4時に着いたら、漁師達はもう食べていた。慌てて食べようとしたら、一人の漁師がビールを用意してくれた。石沢さんのおばあちゃんのお孫さんである。トキシラズの刺身とほっけ、肉の炒め物とカツと盛りだくさんでビールもすすんだ。

食後、最後の熊ウオッチングにでかけたが、全くの空振りに終わった。暫くは来ることができないので、所要所に立ち寄り、景色と雰囲気を読み込んだ。最後の夜に、藤原さんと写真談義をすることができて、自分のこれからの撮影にもおおいに参考になった。藤原さんの写真は本当に素晴らしい。滅多に見ることのできないシーンを、ただ撮るだけでなく、この角度、この表情を撮らないと、というポリシーを持ってシャッターを押している。自分は、熊を撮るにしても、何でも撮ってしまうようなものだ。ピントも合うべきところに、心憎いほど見事に合っている。それから、撮った写真をパソコン画面で編集処理はしないようにしているとも話していた。

写真集を作ったらと話したが、「自分は展覧会にも出さないし、写真集も作る気は無い。自分が良い写真を撮れて楽しめればいいのだ。自分が死んだら写真は全部廃棄してもよい」と話していた。



朝霧の中に浮かぶ知床丸 船上の青の人は大瀬さん





朝仕事から上がってくる漁師



番屋の朝食

番屋食食用カラフトマスを笑顔で見るおばさん

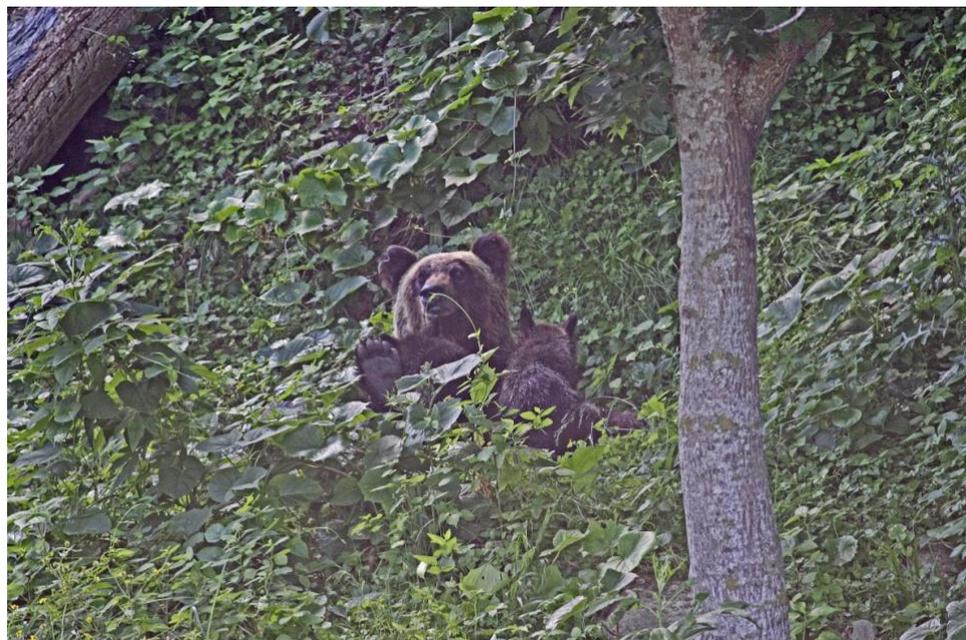


熊ウオッチング中の藤原さん サンルーフからの撮影は最高





ルシヤ川を渡った親子熊



授乳中親子とも寝てしまった



単独熊に行く手を阻まれ、森に入る親子熊



6mの距離の母熊



五右衛門風呂



番屋台所



番屋の朝食



暑い最中、塩作り中の漁師
(イクラ、筋子用の濃縮天然塩)



ルシャ川河口



テツパンベツ川から海へ向かって走るハイラックスサーフ



ルシヤ川の河口でカラフトマスの遡上を待つ熊



オホーツク海の日没

7月23日(火)

【カラフトマス網おこし】

4時15分、鱒網の網おこしに参加させてもらう。早朝の知床の海を渡る風は爽やかで、硫黄山の山頂部分にだけ、朝陽がスポットライトを当てている。テッパンベツ川とルシャ川河口の沖合に網は仕掛けられていた。網をおこしていくと銀鱗が煌めくのがわかる。カラフトマスだ。船に揚げられた鱒は思いっきり飛び跳ね脱出を試みるが、やがて力尽きる。昔の船は船底が浅かったのと、船底が見えないくらい鱒が捕れたので、何匹かは逃げることも可能だった。その当時の自分の仕事は、鮮度を落とさないために、鱒の頭に棍棒で一撃を与え、即死させることだった。揺れる船の上での作業と、勢いよく飛び跳ねるため、3回4回と叩かないとダメだったが、慣れてくると一発でしとめることができるようになったことを思い出した。5カ所くらいの網を揚げたが、時期的に早いせいもあり、70本くらいの収穫だったが、今年のカラフトマスは型が立派なので、お盆過ぎの最盛期が期待できる。



いよいよ今日は帰らなければならない。朝食後ルシャの番屋を藤原さんと共に去ることになり、大瀬さんにウトロまで送ってもらった。そして、すぐに、大宮さんに網走の病院まで送ってもらい、仙台で治療を続けるための紹介状を書いてもらった。

石沢のおばあちゃんは相変わらず元気で、日課の温泉通いを続けている。耳も達者

だし、身のこなしが92歳とは思えない。オダマキの種をいただいた。

夕方、ホテルノーブルの温泉に行った時、前に泊まったときに仲良くなった中国人のトナさんと久しぶりに合ったが、元気で何よりだった。この人は短期間に日本語を覚え、喋るだけでなく、手紙を書くことができるまで勉強し、ホテルの仕事も一生懸命働いている。日本の若者が見習って欲しいくらいだ。



今日の夕食もメヌケ尽くして贅沢極まりない知床最後の夕食を、大宮さんに感謝しつつ美味しくいただいた。



背景は硫黄岳

カラフトマスのオス





水揚げを待つ大瀬さん



白いハマナス



石沢さんのおばあちゃん(92歳)
去年より若くなった！



知床ノーブルホテルのトナさん 背景はホテル



今回すっかりお世話になった大瀬さん(左)、大宮さん(右)

7月24日(水)

ウトロ(8:20)ーR334ー斜里ーR244ー道の駅おだいとうーR44ーD35ー納沙布岬ーD35ー根室ーD142ー花咲岬(車石)ーD142ー落石(17:00) カジカの宿 (138km)



ウトロは暑い。毎年、良くしてくれる大宮さんにお礼を言い、ウトロを後にした。前から気になっていた海別岳山麓に伸びる直線路を上から見たが、あまり上に行きすぎたせいか、期待したほどではなかった。「天国に続く道」というネーミングはどうか、と思う。根北峠は濃霧となり、峠を越えて標津側は濃霧というより霧雨で、路面も濡れていた。道の駅「おだいとう」は北方領土資料館を併設していたので、しばし見学した。あくまで日本側の資料作成の展示だが、これを見る限り、日本の政治家は本気になって返還を考えて交渉してきたとは思えない。今も続いている「弱腰外交」そのものの結果、戦後68年経っても何も進展していない。

「天国に続く道」

豊かな湿原が広がるヤウシュベツ川



野付国道を走っていて、ある小さな橋を渡った時、目に飛び込んできた左右の景色に惹かれ、急ブレーキを掛けてUターンし、橋まで戻って眺めた。護岸工事の一切ない、自然のままの川が緩やかに海に流れ込んでいた。川の両側に広がる湿地帯の緑が、見る者の気持ちを穏やかにしてくれたし、なぜか懐かしさが込み上げてくるものがあった。それはヤウシュベツ川だった。

納沙布岬は閑散としていた。洋上に浮かぶ齒舞諸島は霧のため霞んで見えた。以前来た時は観光客やバイクも多かったのに、人がいないし、観光客相手の店も閉じているところもあるくらいだ。前に来たとき、観光客で賑わっていた花咲ガニの店には客が全くいなく、店も縮小していた。従業員までいない。この変わりようはどうしたんだろうと考えていたら店の人が現れた。結構寒いので、花咲ガニのテッポウ汁を頼み、「観光客いないねえ」と声をかけると、「そうなんですよ。震災後激減してしまい、この状態だ」と嘆いていた。以前は店の前にカニをたくさん並べていたのに、申し訳程度にほんの少し置いていた。「カニは捕れないのですか」と聞いたら、「カニはあります。見てください」と言いながら生け簀の中を見せてくれた。富良野のアイガーに戻ってから食べようと、少し大ぶりで卵を持っているのを2杯送ることにした。「これは絶対自信があります」と言いながら、名刺を渡してくれた。

根室半島は地図で見ると小さいが、広大な牧草地帯が広がる地形で雄大な雰囲気だ。海岸線ばかり走るのも飽きたので、牧の内の内陸に入って走った。牧草地帯の藪の中に平らな人造物があり、どうしてこんな所にと考えたが、戦時中の滑走路の跡というのを帰ってから知った。

ウトロがあんなに暑かったのに、インナーダウンを着ないと寒くて走れない。花咲岬の車石を見学し、落石の外れにある「カジカの宿」には余裕のある時間で着いた。まだ客は誰もいなかったが、風呂に入り、眺めの良いレストランでビールを飲みながら、ぼんやりと太平洋に突き出た落石岬と眼下に見える落石漁港を眺めた。ここの夕食は、とほ宿にしてはビックリするくらいの品数が出された。おかげでビールもすすんだ。



水平線に浮かぶ齒舞諸島

明日の釧路湿原を、ドサンコの馬に乗って散策するのもおもしろいと、宿の主人が教えてくれたので、問い合わせたところ、年齢制限があって、65歳以上はお断りということだったが、単純に歳で判断するなど、理不尽な対応に腹立った。

同室にオフ車の2名が来たが、話すこともないようなので8時過ぎには寝た。



花咲ガニ これを送った



テツポー汁



花咲岬の車石



カジカの宿の夕食

7月25日(木)

カジカの宿(8:30)ーD142ー北太平洋シーサイドラインーD123ーR44ーD123ーR44
ーD123ーD142ー霧多布岬ーD123ー道の駅・厚岸グルメパークーD14ー標茶ーR391
ー茅沼駅ーシラルトロ湖ーR391ー細岡展望台ーR391ー釧路湿原とうろYH (221km)

北太平洋シーサイドラインはバイク走行には快適な道だが、鹿の飛び出しが多いのであまりスピードは出せない。123号線を別海まで行こうと内陸のほうに入ったら、霧のため視界が悪くなり、路面も濡れてきたので、またシーサイドラインに戻って、比較的天気の良い海岸線を走ることにした。霧多布岬は突端まで歩いて行ったが、岬先端は襟裳岬のように少しずつ海に水没していた。寒さで体調が悪くなったので、道の駅厚岸グルメパークで休憩しながら厚岸雑炊なるものを食べて体を温めた。

14号線から内陸に入り放牧地地帯を走ったが、路面は乾いて、ガスもかかっているのにバイクのシールドに水滴ができる。細かい霧のためだ。根室、釧路の北海道東部は地形的に霧が多い。それが、植生とか人間の生活にまで影響を与えている。決して霧は人間にとって厄介者ではなく、恩恵も与えている。霧が多い地形のため、水不足とは無縁で、海岸から地下水は豊富にあると、カジカの宿のオーナーが話していた。

【釧路湿原】

釧路湿原を眺めるには細岡展望台が一番だ、とカジカの宿のオーナーに教えられたので行ってみたが、広大な釧路湿原を一望でき、釧路川が蛇行して流れる様子も見ることができた。

学生時代、シラルトロ湖の名前に惹かれて湖畔に行った帰り、駅前の民家の年寄り夫婦に、家に上がって休んでと言われ、カボチャの煮付けをご馳走になったが、今は駅の回りには民家も無くなり、駅舎もこぢんまりとした建物になっていた。駅舎の脇の大木は当時のものと思うが記憶にない。シラルトロ湖も林の間から見た記憶があるが、記憶の映像と現実の映像がピタッと重なることはない。

釧路湿原とうろYHは、数年前に泊まったことがあるが、こぢんまりとした居心地の良い印象があったので今回も泊まることにしたのだが、部屋の記憶がない。今晚の客は一人ということで、6畳間の和室に一人で泊まることになり、少々体調が落ち目だったのでちょうど良かった。夕方、駆け込みの客が2組来たが、部屋は一人のままにしてくれた。

夕食は、東京からの一人旅のおばさんと二人だけの食事となったが、良く喋る人だ。昭和24年生まれと言っていたので4つ年下で、若い頃に山形蔵王のドッコ沼にある宿でアルバイトをしながらスキーをしていたと話していた。自分もその宿はスキーの時に頻りに利用していたと話したら、話がドンドン弾んできてしまっ、聞くのも疲れてきた。一ヶ月半の一人旅の最中と言っていた。この年齢でたいしたものだと思ったが、あまり賛同すると止まらなくなりそうなので、終わりにした。あまりにもテンポの速い話しには着いていけない。周波数が合わないのである。

今回は釧路湿原をゆっくりと探索しようと思っていたし、明日は雨の予報なのでバイクで走りたくないし、明日もここに泊まることにして、午前中はガイドによる湿原探索ツアー、午後は釧路川をカヌーで川下りをする予約を入れた。



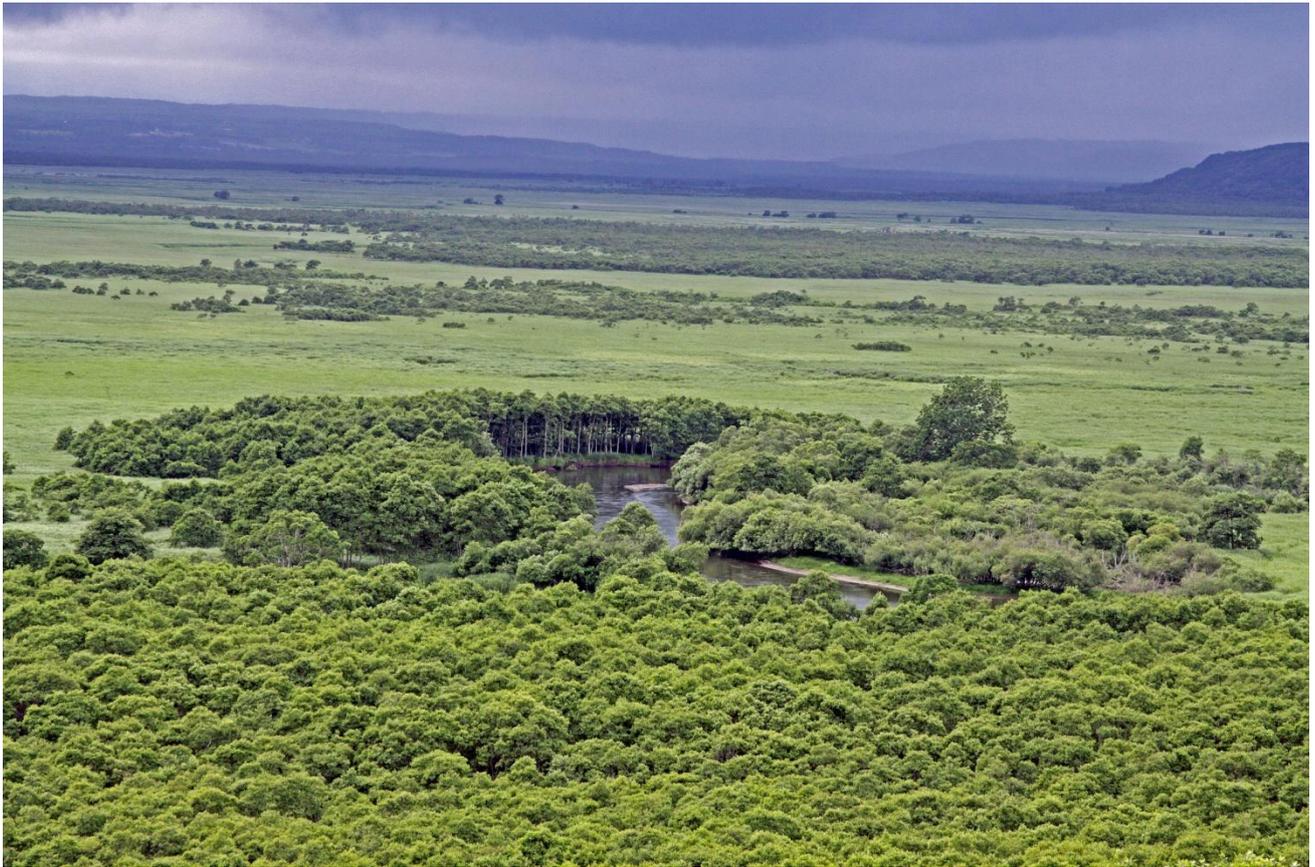
霧多布岬

道道14号線の牧草地



ホザキシモツケ





細岡展望台より釧路湿原



シラトロ湖

茅沼駅



7月26日(金)

急に明るくなり、朝かと目を覚ますと、天井の非常灯がこうこうと点いていたが、まだ夜中だった。非常灯のため、消すこともできないので、そのまま朝までまた寝た。どうやら、停電のために非常灯が自動的に点灯したらしい。朝になっても停電は復旧していなかったが、朝食はガスを使って作ってくれた。

9時よりガイドによる湿原ツアーだが、客は自分一人なので、観光客があまり行けない所の案内と、できれば丹頂鶴を見たいと希望を言った。最初に岩保木水門を案内されたが、古い水門の建物と新しい水門の建物が近くに並んであった。古い建物は明治の洋風建築の香りがする建物で、湿原の中に妙に溶け込んでいた。いずれにしても、新旧ともに、一度も使われたことは無かったそうだ。ここから見る湿原は自分の目線の高さで眺められる。広大な葦原に点々とハンノキが生えているのが、まるでサバンナのように見える。その葦の中に、運が良ければ丹頂が見られる時もあると言うが、今日は見えない。

湿原を横切るダートをしばらく走り、コッタロ川近くでオオウバユリの花の群生を見ながら行くと、鶴居村に着いた。鶴居村の冬の丹頂は有名だが、夏はあまり見る事ができないと、ガイドの橘さんは話していた。しかし、「あっ、いた！」と指さす方を見ると、緑の草原に丹頂が2羽いた。400mmの望遠で何とか撮れそうだったので、レンズ交換ももどかしく外に出て構えた。つがいの丹頂と言っていた。もう少し近いところにいると良いんだけど、等と勝手なことを言いながら走っていると、本当に目の前に大きい丹頂が10羽近くいた。あまりにも多くいるので、「飼育しているのですか」と聞いたら、「自然の丹頂です」と言っていた。そして、「これはまだ若い丹頂で、つがいを作れないから群れで行動しているので、そのうちに、この中からつがいの相手を見つけるのだ」とも言っていた。もう少し行くと「雛の丹頂だ。2ヶ月くらいかな。珍しい。羽の色が茶色の雛はなかなか見られない」と言っていた。運が良かったみたいだ。



岩保木水門

釧路川と釧路湿原





蛇行するコッタロ川



ノリウツギ【サビタ】の白い花
ピンクはホザキシモツケ



二本松展望台より釧路湿原



幼鳥の丹頂鶴



雛の丹頂鶴



草原の丹頂(つがい)





予想外に丹頂を多く見ることができ、なんて運が良かったんだろうと鶴居村を離れようとしたとき、道のすぐそばの草むらにつがいの丹頂がいた。段々欲が出てきて、丹頂の飛んでいるところが見たいと言うと、近い所にいるから、車から降りたら飛ぶかもしれないとガイドが言うので、カメラを持って降りたが、全く飛ぶ気配はなかった。

この時期、北海道の至るところで咲いているきれいなピンクの花が目立つ。ホザキシモツケという花だが、この湿原には群生している。対照的に白い花はノリウツギと言って、方言でサビタと言ひ、原田康子の小説「サビタの記憶」で有名になったみたいだ。なぜサビタという方言なのかはガイドもわからないと言っていた。また、この時期、木に咲いている白い花が目立つが、ハシドリと言う釧路市の木だそうだ。ちなみに標茶の木はミズナラとのこと。

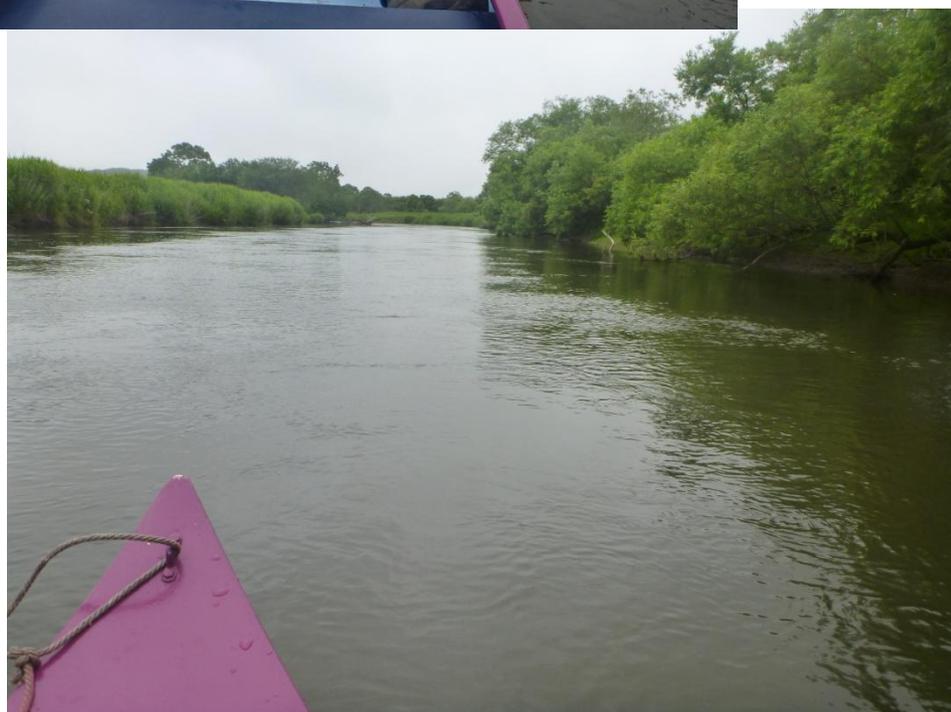
午後はカヌーで釧路川の川下りだが、自分とインストラクターの二人だけだった。上流のスタート地点まで車で移動し、1時間半の川下りが始まった。オールで漕ぐ水音以外には、川の流れと鳥のさえずり以外は音の無い静寂の世界だ。インストラクターも余計な話しは一切しない。前は10人乗りの大きなカヌーだったので、人の声がうるさかった。釧路川はいつ見ても濁っているのは、護岸工事のされていない自然のままの川で、川岸がどんどん流れによって浸食され、その削られた土が流れ出すから濁っていると話していた。浸食されたところの川には木が水没していて、カヌーには危険らしい。その浸食が川の蛇行を形成し、三日月湖を作りだし、釧路湿原の独特の景観を作り出す。

夕食前に洗濯をしたが、洗濯機によって使い方がいろいろあるので聞いたところ、女性のオーナーは使い方を丁寧に教えてくれた。

夕食は、釧路マラソンに参加するためにわざわざ前橋から来た人と二人で食べた。全国の大会を回っているらしく、埼玉県庁の川内優輝とは顔なじみという昭和21年生まれの男だ。マラソンの成績は気にしないで、マラソンと観光を兼ねているのだと言っていたが、山登りだったら何時間でも歩くが、4時間も走る気にはなれない。行者ニンニクの醤油漬けが美味しくお代わりをしたら、最初はできないような素振りをしていたオーナーが、さりげなくテーブルに置いていった。このオーナーの客との自然な接し方には好感がもてて、それが居心地を良くしているのかもしれない。ある朝に皆で記念写真を撮るとき、登山靴を履くのが面倒なので、そばにあったサンダルを履いて出たら、「私のサンダル履かないでよ！大きくなるでしょ！」と、例の良く喋るおばさんに一喝され、慌ててそばにあった別のサンダルを履いたら、「私のも履かないでよ」と言った時のオーナーの表情に親しみを覚えた。



釧路川をカヌーで下る





釧路川の浸食地形



河畔のシカ





川下りゴールの塘路湖



7月27日(土)

釧路湿原とうろYH(9:30)—R391—釧路湿原道路—R38—直別—D1038—R336—R38
道の駅うらほろ—R38—R336—D55—R236—D15—幕別—R38—十勝中央広域農道
—十勝川温泉
ホリデーイン十勝川 (237km)

朝食の時、東京から来た良く喋るおばさんが、前日、知床のウトロまで行って来たことを話していた。電車とバスを乗り継いで行って、昨夜遅くYHに戻ってきたらしい。「せっかく釧路湿原に泊まっているのだから、ここを楽しんだら」と言って、昨日のガイドとカヌーのことを話したら、「今日、それやるわ」と言い、マラソンおじさんも一緒に行くということになった。YHの営業をやったようなものだ。

釧路湿原道路は湿原を信号なしで横断する道路だが、以外と展望はよくないが、快適に走ることができる。道の駅しらぬか恋問の浜辺で喉の渴きを潤す。1038号線は海岸ギリギリを走る道路だが、濃霧で視界不良。道の駅うらほろで昼食をとり、今日の宿まではあまり遠くないので、十勝平原を彷徨うように走り回った。R336は十勝平原の原野を切り開いた道路で、快適に走ることができるが、村落も少なく、ガソリンスタンドもなかなか見当たらない。ガス欠を心配しながらも大樹町周辺とか十勝川大橋を走り回った。

ホリデーイン十勝川はすぐわかった。バイクの音を聞いたフロントマンが出てきて、玄関先の屋根の下に置いていいよと言ってくれ、洗車するんだったらこのホースを使って、と言ってくれた。ありがたいが洗車する気は無い。ここのホテルは公共の宿で比較的安いが、食事も良く、なにより貴重なモール温泉が肌にやさしく疲れがとれる。



十勝川河口橋



D1038 号線

7月28日(日)

十勝川温泉(10:00)—R38—狩勝峠—R38—道の駅南ふらの—山部—D985
—富良野(14:00) ロッチ・アイガー (177km)

朝降っていた霧雨もあがり、路面も乾いているので、道草もしないで国道38号をひたすら富良野へと走った。峠越えの前に給油のために新得のガソリンスタンドに寄ったら、年配のスタンドの人が話しかけてきて、釣りの話になった。「このサホロ川はどこでもヤマベが釣れるよ。大きいニジマスも釣れるよ」と、釣り堀で釣るように簡単に釣れるような話しっぷりだった。何年前のことかわからないが、この話しは全く当てにならない。

狩勝峠付近は濃霧だった。峠をそのまま下っていくと、一人のチャリダーが必死の形相でペダルをこいで登ってきた。思いっきり手を振って励ますと、苦しい表情の中にも笑顔を見せ、思いっきり手を振り返してきた。道の駅南ふらのでお昼を食べたが、富良野へそ祭りのためか、大変な混雑だった。

2時頃アイガーに着き、一休みした後、釣りに出かけた。フライは小指の怪我のため竿を触れないので、エサ釣りにした。西達布川は川の護岸工事のため様子が変わっていた。日曜日のため釣り人も多く川に入っていた。食べて美味しそうなニジマスは釣れるが、大物は出そうにないので早々に川から上がった。

明日も含めて夕食は外食となっているので、「くまげら」にしようと思っていたら、予約で満席と断られた。年一度の祭りとなれば混むのは当然で、こんな時に街に出ようとするのが間違いだった。しかたなく近くのレストランに入ったが、当然あると思っていた酒は無く、バドワイザーのビールだけだった。

7月29日(月)

【奇祭 富良野へそ祭り】

釣りが諦めきれず、西達布川と空知川の出会いに早朝出かけ、フライで挑戦したが、やはり、小指が痛くて竿を満足に振れない。昼は近くのそば屋で食べ、午後は休養で昼寝をした。

へそ祭り期間は夕食を外で食べるのはやめて、寿司をとることにして、納沙布岬から送った花咲カニを食べることにした。2杯送ったうちの1杯は、いつもお世話になっているアイガーの佐藤さんに食べてもらった。カニ屋の主人が自信を持って勧めただけあり、希に見る美味しいカニで、甲羅に入れて飲む酒は、カニの味噌が混じり、酒をまろやかにして旨味を増す。

偶然とは言え、せっかくへそ祭りの期間に富良野に来ているのだから、一度は見ておこうと食後街に出かけた。地理的に、北海道のへその位置にある富良野は年に一度のへそ祭りで街中が燃え上がる。へそ祭りとあって、お腹に思い思いの顔を描いて、本当の顔は隠していた。富良野駅前の道路を完全に通行止めにして、歩行者天国のようになり、各参加団体は特設ステージの前を踊りながら周回し、その間に審査をする仕組みだった。景気の良い音楽に合わせて、参加者は同じ振り付けで踊りまくり、特に二日目の tonight は賞が決まるとあって一段と踊りに熱が入っていた。囃腹が絵になるのは、太鼓腹の人であるが、小さな子供の囃腹も思わず笑ってしまう。女性の参加者もいたが、残念ながら本当の囃腹ではなかった。参加団体の中に

は、腹は全く出さず、着物姿で踊るだけというのもいたが、せっかくの盛り上がりには水を挿すようなものだ。



JA富良野の参加団体



プリンスホテルの参加団体



女性だけの参加団体





女の子の参加団体



男の子の参加団体

「雑」の二人も、
年一度の祭りとあって着物姿

若い時(?)、ママ(右)はへそ祭りに参加して
優秀賞の賞金をもらっている



7月30日(火)

ロッヂ・アイガー(10:00)—D985—R237—道の駅樹海ロード日高—R237—D131—D74—鶴川—D10—早来—R234—D259—苫小牧フェリーターミナル(15:30)(19:00)～～太平洋フェリーきたかみ～～ (197km)



今日はひたすら帰るだけ。無事に苫小牧に着かなければ、今までの充実した旅も台無しになってしまう。いつものように、日高の道の駅で休憩し、むかわの大豊寿司でシシャモの寿司を食べ、苫小牧郊外の勇払原野を走り抜けた。フェリーターミナルに着いた時はさすがに疲れが出てきて、待合室でしばし眠った。夕食はいつものようにレストランで乾杯したが、やはり、縦走が完全にできなかったためか、不完全燃焼の感が残って、燻るものがあった。

7月31日(水)

～太平洋フェリーきたかみ～～仙台港フェリーターミナル(10:00)—自宅(10:30) (25km)

仙台の天気は曇り。今回の旅は天候に恵まれ、バイク走行中の雨降りはなかったが、家に着くまでも雨の心配はなかった。

【総走行距離】 2350km

【あとがき】

今回の縦走の判断は迷った。強行しても行けたのではという考えと、諸条件を考慮して断念したのは正解という考えが拮抗している。天気が快晴という状況だったら、予定通り決行したと思う。しかし、あの天気概況から判断すると、雨を覚悟しなければならなかった。例え雨だったとしても、テント場に遅くとも4時に到着できるのであれば問題はなかった。しかし、正午を過ぎてから、最大の難関の2000m超のオプタテシケ山を登ることは、その下山ルートが、残雪の多い標高差600mの急斜面を下らなければならないことを意味する。休憩無しで山行所要時間が5時間なので、順調に行ってもテント場につくのは6時になる。6時でもまだ明るいので問題はないが、天気が悪い場合は状況が違ってくる。そもそも、美瑛富士避難小屋分岐通過時間が予定より一時間遅れたのが計算外だった。その原因はザックの重量オーバーである。自分の体力を考えると25kgは重すぎた。特に、十勝岳から美瑛富士分岐までの間で、大きい岩がゴロゴロしているコースの長い下山には、ザックが重い分、慎重に下らなければならなかった。結果的に翌日以降の天気からして、途中下山は正しかったのかもしれないし、来年以降の山行に大いに役立つことになった。

早めに下山したおかげで、その後の日程に余裕ができたため、釧路湿原をある程度時間をかけて探索することができた。丹頂鶴との出会いは予想外だっただけに、あれだけの数をあの距離で見ることができたのは、今回の旅に新たな彩りを添える結果となった。自分の勝手な希望を聞いてくれた釧路湿原とうろYHの橘さん(オーナーのご主人)のおかげと感謝している。

熊もそうだが、ここの丹頂も同様に、特別の保護とかをしなくても、自然のままに生息できる、人間との共存環境を作り上げ、それを維持していくことは人間の“豊かな”生活へと繋がるものと思っている。



知床の親子熊